

樺山本「要用集」について

芳 即 正

樺山本の発見

「要用集」は普通「薩藩政要録」といわれ全 6 巻から成り、薩摩藩々政関係の重要事項をまとめた要録である。薩藩史研究上の貴重な史料で、既に昭和34年度に鹿児島県立図書館内の鹿児島県史料刊行会から出版され、よく利用されている。刊本例言に記されているように、同書原本は鹿児島大学附属図書館所蔵の玉里文庫の中にあり、もと江田氏の蔵本だという。このほか巻六にあたる旧遠矢氏蔵本「樺山家伝家」本が、前者と相異なる点だけ追加収録されており、後者は現在鹿児島県立図書館に所蔵されている。前者玉里本は文政11年改編でその記載数字が文政 9 年（1826）現在の資料をもとにしているのに対し、後者は嘉永 4 年（1851）現在の資料によっており、その間25年の年代の開きがあって、当然数字その他に相異が生じているからである。

では後者はどこの樺山家に伝わったもので、しかも巻一から巻五まではどうなっているのだろうか。その点については皆目見当がつかなかった。たまたま去る 7 月12日（昭和54年）筆者は、平凡社の高橋洋二氏らと薩摩郡祁答院町蘭牟田の樺山不揺麿氏宅を訪れた。この不揺麿氏は例の文化朋党事件（近思録くずれ）で切腹した家老樺山主税の子孫である。同家に主税切腹の時に用いた刀があり、肖像画も所蔵されているというので、その取材のためである。ところがその時不揺麿氏から、資料も余り残っていないがこういうものがある、といって見せてもらったのが数冊の筆字和本である。みるとその 1 冊の目録に、要用集一から六までの目録が記され、その五まで 5 冊がそろっているが六はない。正しく要用集 5 冊である。一から四は表紙なしで、五だけが表は紺、裏は黒の表紙がつけられている。保存状態は割に良好で、巻三の 1 枚目が破損し、同じく巻三の初め15～16枚と巻五の初め 7 ～ 8 枚に相当の虫喰いがめだつ程度である。不揺麿氏は要用集は 6 冊あるそうですが、うちにはこれだけしかないのですと、表紙のない 4 冊だけを示された。しかし筆者の調査で表紙のある 1 冊も要用集であることを告げると驚いておられた。そこで後日県立図書館所蔵の「樺山家伝家本六」と対照してみると、まずその筆蹟が似通っている点、及び巻六の(73)「年々江戸御続米并江戸大坂行船数之事」・(89)「樟脳方御利潤銀之事」等が嘉永 4 年の資料と明記してあるのに対し、後述の如く今回発見の樺山本巻二の(17)や巻三の(37)又は巻四の(39)等にも、嘉永 4 年又は同 5 年の資料と明記したものがある点等から、両者は全く同一系統の要用集であると断定して差支えないと確信するに至った。即ち図書館本に記された樺山家とは、実は

旧蘭牟田領主樺山氏であることが明らかになった。刊本例言が図書館本を旧遠矢氏蔵本としたのは表紙に遠矢氏と記され、同書1頁に「鹿児島市常盤町七八三遠矢良和」というスタンプ印及び「遠矢」の認印が押されているからであろうが、元来樺山家本なのである。遠矢良知氏は元軍人で、沖縄戦の司令官牛島満中將とは陸軍士官学校の同期生だったという（同氏には「沖縄戦に自衄せる牛島満君の面影」の著がある。昭和29年6月）。どうして巻六だけが樺山家から放れたのか不揺麿氏にも不明だという。樺山家は鹿児島市下荒田町の現在八幡小学校の校地に所在し、大正9年市立鹿児島商業学校（現鹿児島商業高校の前身）の敷地となった。樺山家が鹿児島市在住時代にでも貸出され、それが遠矢氏の手に入ったものであろう。図書館に入ったのは昭和27年3月である。それはともかく樺山本要用集は全6巻が完全に現存していることが確認されたわけである。

両者の内容上の異同

樺山本六については既に玉里本との相異点が紹介されているので、以下に要用集一から五について、樺山本と玉里本の両者を比較してその主要な異同を摘記してみよう。まず巻五までの全65項目中次の24項目は全くその内容に相異がない。（左側数字は樺山本・玉里本共通の朱書の目録番号で、原文は漢数字である。）

- 2 京竿以来御検地高作様之事
- 5 勅願所之事 附一国一ヶ寺之事
- 8 長日相勤寺之事
- 10 御元祖以来 御居城之事
- 11 御関狩并吉野御牧之事
- 18 半出物米高之事
- 21 島津周防殿島津因幡殿御取立一所之地被下置候次第之事
- 24 御一門并独礼之面々御城代御家老を始諸士以下之者共迄妻手札帳面等書様之次第被相究候事
- 25 御分国豎横并廻町間之事
- 26 他領境目番所并辺路番之事
- 40 前々移地頭在番被 仰付置候郷并当時移地頭押等被 仰付置候郷之事
- 42 誓詞日之事
- 43 御家老寄合日之事
- 44 評定所式日之事
- 45 犬追物稽古日之事

- 47 表方支配諸御役座等之事
- 48 御勝手方支配諸御役座等之事
- 50 御役被 仰付次第之事
- 52 諸御役人御役料米被下様之事
- 53 諸御役座書役小役人持高依員数役料米并支度料銀等不被下候事
- 59 琉球拝借銀之事
- 62 達 貴聞縁与之事
- 63 諸士子共半元服前髪取之事
- 64 諸人訴訟之事

巻 数	目 録 番 号
一	1 ～ 6
二	7 ～ 18
三	19 ～ 37
四	38 ～ 64
五	65

なお各巻収載番号は左表の通りである。

上記以外の41項目は年代の推移に伴い種々内容に相異のあるもので、そのうち例えば(1)で将軍家斉・家慶の「御判物頂戴」の如く、多少の事実を追加したものがあり、次の16項目がそれに該当する。

- 1 御判物高并御目録高之事
- 4 諸寺門首并山伏袈裟頭之事 附神主之事
- 7 御目見寺社并山伏之事 附寺高之事
- 9 達 貴聞住職被 仰付寺院之事 附御家老承住職申渡候寺院之事
- 12 御城代相勤候人之事
- 13 貴久公以来御家老職相勤候人之事
- 14 家久公以来御談合役御詰役御側詰(役)若御年寄若年寄相勤候人之事{()内は文政 9 年目録}
- 15 光久公以来横目頭大御目附大目附大目附格相勤候人之事
- 27 津口番所之事
- 28 異国方番所并遠見番所之事
- 29 火立番之事
- 31 御納戸御道具之事
- 34 御数寄屋御道具之事
- 46 御使式日之事
- 49 御側支配并若年寄大目附支配諸御役座等之事
- 61 諸士跡目并隠居家督嫡子成養子之儀定被置事

以上のほか文中追加量の相当多いものとして

6 御先祖様御菩提所并有由緒寺院之事

附御家御代々御正忌日御夫人御正忌日之事

がある。ただしこの「附」の部分は1～2行の追加である。また内容変更の多いものとして、

60 御国薬種之事

がある。

次にその変更内容が主として数字及び人名に関係しているものがある。25年間の歳月の歩みにより、例えば神社仏閣数が増加していたり、又地頭の交代や領主家その他での代替りによる変更の類である。まず主として数字の変更によるものをみると、そのうち次の3項目はごく少量の数字変更のあるものである。

32 御馬并御馬具之事

36 高式百石以上士人数并依人躰持高員数被相究候事

41 御仮屋并御茶屋之事

さらに次の10項目はほぼ全文の数字変更を伴うもので、大幅な相異のあるものである。このうち(17)・(37)は嘉永4年分、(39)は嘉永5年の数字を使用したことが明記されており、この樺山本要用集は少なくとも嘉永6年以後の改編にかかることを示している。玉里本が文政9年の資料を用いて2年後の文政11年改編とすると、樺山本は或は安政元年(嘉永7年・1854)の改編にかかるものと推定してよさそうである。

3 神社仏閣寺院数之事

16 御検地高之事

17 諸給地出物米之事(嘉永4年資料)

30 御武具之事

33 塩硝并硫磺員数之事

35 置米置銀之事

37 諸役座より相納寄銀之事(嘉永4年資料)

39 宗門手札御改人数総之事(嘉永5年改)

57 諸御役分高員数之事

58 諸御役料米并御切米御扶持米其外御国中諸払銀米員数之事

65 諸郷郡分地頭附并郷士人躰持高之事

附琉球道之島道程之事

最後に次の9項目は人名の変更により、ほぼ全文が変わっているものであるが、(38)は後半部分には余り変更はない。

- 19 御直并 御前元服且又元服之御礼御内証元服被 仰付候人数家筋連名次第之事
- 20 家格被相定候人并家筋連名次第之事
附家ニ付年頭八朔御太刀進上人数之事
- 22 島津之御称号被下置候面々二男以下名字拝領被仰付候事
- 23 御家之字名乗来候面々江二男以下名乗之字拝領被 仰付候事
附実名遠慮之字被 仰渡候事
- 38 御家老組并御小姓与番頭小番新番御小姓与人躰之事
- 51 御城代御家老御側詰若年寄大目附大番頭寺社奉行御勘定奉行御小姓与番頭当番頭御側表
御用人町奉行御側役迄御役料高并御役料米被下候人之事
- 54 先祖之勲功且又其身依功代々御切米被下候人之事
- 55 御扶助米被下置候人之事
- 56 一世御養料被下置候人之事

宗門手札改人数減少の意味するもの

以上玉里本と差異のある諸項目中の資料は、それぞれ貴重なものを含んでいるが、特に(39)や(65)は文政9年から25年余り後の藩内総人口はもとより、各郷別の石高や郷士人数その他を知悉する上から特に貴重である。いま(39)の資料により玉里本との相異点を検討しながら、若干の考察を加えてみたい。

(39)は嘉永5年(1852)の宗門手札改めの結果を掲載したものである。これまで薩藩領内の国別・身分階層別等の人口総体は、文政9年(1826)のものが最後で、それ以後は幕末まで不明であったので、本資料はこれまで未知の全くの新資料ということになる。薩摩藩の宗門手札改めの実施については、嘗て桃園恵真氏が研究発表されており、^(注1)それによると30回とあるが、それには玉里本要用集に掲げられている文政9年の手札改めが抜けているので、これを加えると少なくとも31回に及ぶわけである。文政9年前後から幕末までの分についてみると、別表の如く文政7年以

文政7年申(1824)
同9年戌(1826)
天保2年卯(1831)
同9年戌(1838)
弘化2年巳(1845)
嘉永5年子(1852)
安政6年未(1859)
慶応2年寅(1866)

降8回にわたり、文政9年の2年目・天保2年の5年目以外すべて7年毎に行われている。

文政9年を例外と考えれば当時は7年毎が原則となっていたのであろうか。要用集の中には前回の手札改めの人数と比較した増減数が記入されているので、玉里本では前回文政7年と、樺山本では弘化2年と比較されている。ただ樺山本嘉永5年の場合、琉球については前回との比較について、次のようなことが記入され

れている。

但弘化二已改之節佛朗人等致来著居，依願改方被召延置候付，戌改元人数ニ御座候とあり，弘化2年の宗門手札改めの時にはフランス人が来ていたため，願い出によって手札改めを延期したので，今回の分との比較の元人数（基本人数）は戌年即ち天保9年の数字であるという意味である。フランス人云々というのは，その前の年弘化元年（天保15年）3月フランス軍艦アルクメーヌ号が那覇に来航し，琉球政庁に対して通信貿易布教等を要求，謝絶されると宣教師フォカード及び中国人通訳を上陸残留させて出航してしまった。困った琉球政庁では在番奉行汾陽光明と協議してフォカードを真和志間切天久村聖現寺に居住させ，昼夜警戒を加えると共に藩庁に報告，藩では120人余の兵を派遣して万一に備えるという琉球外交事件の最中であつたこと^(注2)を指す。このため琉球では弘化2年の手札改めなど実施する余裕はなかったということであろう。従って琉球に関しては対比年度が異なるわけである。

以下に嘉永5年の手札改めによる藩内人口の推移を，文政9年のそれと比較して表示すると，次の表Ⅰから表Ⅴまでの如くなる。

表Ⅰ 藩内総人口

	総人口	前回比	外穢多慶賀行脚
嘉永5年（1852）	838,551人	8,051人	5,355人
文政9年（1826）	865,141人	8,921人	5,040人

表Ⅱ 鹿児島及び薩隅日三国分（但私領を除く）

	鹿児島	薩摩	大隅	日向	小計
総数 (注1)	76,912 (注3) (72,350) (3,435) (5,092)	247,804 (△ 1,339) 261,514 (6,412)	118,236 (△ 2,038) (128,994) (△ 3,888)	54,259 (△ 6) (56,663) (△ 704)	497,211 (52) (519,521) (6,912)
士（郷士）人跡	4,487人 (4,325)	10,950人 (10,846)	7,687人 (8,031)	4,197人 (4,354)	27,321人 (27,556)
同 人 跡 外	4,972 (4,466)	19,152 (19,523)	9,636 (10,255)	4,889 (5,321)	38,649 (39,565)
士（郷士）妻娘	8,712 (8,003)	27,147 (27,515)	13,913 (14,592)	7,340 (7,702)	57,112 (57,812)
福昌寺役人等男女	18 (18)			(飯隈山) 104 (92)	122 (110)
出 家	285 (297)	267 (239)	169 (165)	84 (77)	805 (778)
社 家				0 (574)	0 (574)
近在（諸在）男	7,497 (7,592)	75,875 (82,238)	37,728 (42,174)	15,601 (16,723)	136,701 (148,727)
同 女	6,784 (6,693)	70,699 (75,774)	33,817 (37,560)	13,886 (14,735)	125,186 (134,762)
苗代川等男		(苗代川) 595 (721)	(笠野原) 427 (387)		1,022 (1,108)
同 女		(同) 556 (669)	(同) 411 (371)		967 (1,040)
三 町 男	2,001 (2,447)				2,001 (2,447)
同 女	2,039 (2,494)				2,039 (2,494)
野 町 男	61 (75)	1,570 (1,458)	1,767 (1,837)	886 (852)	4,284 (4,222)
同 女	68 (78)	1,434 (1,428)	1,573 (1,594)	797 (743)	3,872 (3,843)
浦 浜 男	47 (55)	16,093 (16,457)	(半浦含む) 3,485 (3,844)	701 (809)	20,326 (21,165)
同 女	19 (33)	15,493 (15,923)	(同) 3,068 (3,336)	659 (675)	19,239 (19,967)
諸士家来并足輕諸座 附寺社門前(注2)	39,922 (35,774)	7,940 (8,668)	4,488 (4,821)	5,115 (4,006)	57,465 (53,269)
遠 島 人		33 (55)	(内35人公儀流人) 67 (27)		100 (82)
外 穢 多 慶 賀 行 脚	86 (105)	2,297 (2,231)	1,098 (997)	703 (672)	4,184 (4,005)
外 二 都 等 居 住 者	738 (△ 8) (747) (109)				

注1. 総数欄ほか各欄の上段は嘉永5年、下段（ ）内は文政9年の数字である。

注2. 本欄鹿児島以外は、郷士下人并足輕中宿諸座附寺社門前と読みかえるものとする。

注3. 総数欄右側（ ）内は前回手札改との比較増減を示す。即ち上段は弘化2年と、下段は文政7年との比較である。

表 III 私 領 分

	薩 摩 私 領	大 隅 私 領	日 向 私 領	私 領 合 計
総 数	65,758人 (375人) (68,000人) (916)	37,581人 (223人) (39,666人) (△ 538)	19,476人 (470人) (18,991人) (△ 64)	122,815人 (1,068人) (126,657人) (314)
家 来 人 数	4,427 (4,336)	3,422 (3,430)	2,437 (2,348)	10,286 (10,114)
同 人 数 外	7,931 (7,816)	4,189 (4,411)	2,718 (2,956)	14,838 (15,183)
家 来 妻 娘	11,531 (11,059)	6,385 (6,222)	4,572 (4,636)	22,488 (21,917)
社 家	132 (142)	42 (47)	15 (21)	189 (210)
出 家	76 (68)	75 (73)	29 (30)	180 (171)
百 姓 男	15,642 (17,122)	6,336 (6,957)	2,133 (2,243)	24,111 (26,322)
同 女	14,062 (15,904)	4,825 (5,479)	2,369 (2,533)	21,256 (23,916)
野 町 男	276 (262)	85 (96)	790 (780)	1,151 (1,138)
同 女	288 (271)	68 (75)	770 (618)	1,126 (964)
浦 浜 男	2,787 (2,874)	2,717 (3,016)		5,504 (5,890)
同 女	2,429 (2,434)	2,089 (2,224)		4,518 (4,658)
塩 屋 男		319 (297)		319 (297)
同 女		212 (213)		212 (213)
家 中 足 軽 井 寺 社 門 前 末 々 男 女	5,777 (5,712)	6,751 (7,111)	3,643 (2,726)	16,171 (15,549)
公 儀 流 人 等		66 (15)		66 (15)
外 穢 移 慶 賀	670 (574)	196 (173)	289 (272)	1,155 (1,019)

注 1. 表の見方は表 II の (注) 参照。

2. 薩摩私領で嘉永 5 年分総数欄は 400 人多い。多分百姓女が 400 人不足しているのではないか。

また、日向私領でも文政 9 年分総数欄が 100 人多い。従って何れも私領合計欄は縦欄が合わない。

表Ⅳ 奄 美 諸 島

	大 島	喜 界 島	徳 之 島	沖之永良部島并与論島	小 計
総 数	37,714人 (2,280人) (36,375人)(329人)	10,852人 (1,139人) (9,329人)(△ 859人)	21,961人 (2,139人) (18,336人)(1,606人)	14,598人 (1,528人) (13,625人)(10551人)	85,125人 (7,086人) (77,665人)(2,127人)
郷 土 格	525 (109)	52 (4)	193 (7)	66 (0)	836 (120)
同 妻 娘	492 (72)	36 (0)	135 (0)	67 (0)	730 (72)
出 家				0 (1)	
諸 在 男 女	36,399 (35,874)	10,619 (9,223)	21,429 (18,147)	14,335 (13,570)	82,782 (76,814)
遠島者(赦免居附含)	298 (320)	145 (102)	204 (184)	130 (54)	777 (660)

(注) 表の見方は表Ⅱの注参照

表Ⅴ 琉 球

	琉 球
総 数	132,662人 (△ 5,608人) (140,549人)(△ 541人)
按司親方并士	30,121 (28,879)
同 土妻娘	19,970 (21,821)
社 家	10 (10)
寺 院	84 (89)
諸 在 男 女	67,821) (75,418)
家来下人其外末々男女	14,656 (14,332)
外 行 脚	16 (16)

(注) 表の見方は表Ⅱの注参照，但し上段 () 内は
天保9年との比較減数。

表Ⅵ 江戸時代薩藩人口の推移

年 次	総 人 口
貞享元 年 (1684)	557,083人
宝永3 年 (1706)	666,541
元文2 年 (1737)	817,635
延享2 年 (1745)	843,808
宝暦3 年 (1753)	872,083
同 11 年 (1761)	879,539
明和9 年 (1772)	883,969
天明6～7年(1786～7)	842,406
寛政2 年 (1790)	853,591
文政9 年 (1826)	865,141
嘉永5 年 (1852)	838,551

(鹿児島県史第2巻及び表Ⅰによる。)

最後の表Ⅵは江戸時代における藩内総人口の推移を示すもので、まずこれで気付くことは、この嘉永5年の838,551人は延享2年以来の約1世紀余の間において、最も少ない人口であるということである。しかも文政9年度に比べて26,590人即ち約3%減少している。これをどう考えるべきであろうか。

この文政9年から嘉永5年迄の26年間には、有名な調所笑左衛門の財政改革が行われ、調所活躍の20年間はすっぽりはまりこむのである。薩藩では文政末年藩債500万両の巨額に及び、藩財政は全く立ち行かなくなった。そのため文政10年末側用人調所に財政改革主任を命じ、以来嘉永元年12月自殺するまでの約20年間、調所は文字通り命がけで改革に当たったのである。調所は周知の如く、500万両の藩債250年賦償還法や奄美大島・喜界島・徳之島三島砂糖の総買入れ即ち専売制の実施、更に国産品の改良増産や密貿易その他により財政を立直し、200万両がらの営繕費をまかなった上に、50万両の備金を藩庫にたくわえたといわれる。こうして調所死後4年目の宗門手札改めの結果、藩内総人口は調所改革直前の文政9年に比べて3%減少したというわけである。^(注3)よく人口の増減が藩の政治経済的条件の反映として指摘される。明治以後100年の日本と徳川300年間のわが国人口の推移とを対比した時、政治経済社会体制の違いが如何に国民人口の動態に影響するかを、われわれはよく知っている。従って人口動態とその社会の政治経済的条件との相関関係を否定することはできないであろう。こういう観点からみる時、嘉永5年の人口急減は調所の財政改革と密接な関係があると考えてよくはないか。少なくともその関連を否定することはできないであろう。しかもその減少の内容を地域別にみると、表Ⅶの如く薩・隅・日三国と琉球で大きく減少し、むしろ鹿児島と大島諸島では増加しているのである。中でも大島諸島の増加は注目をひく。薩・隅・日三国の中でも特に大隅国の減少比率が高い点も注目すべきである。

次に地域毎にその階層別増減数を整理したのが表Ⅷ及び表Ⅸである。これは寺社家や遠島人・苗代川等少数特異のものは省き、武士はその妻娘迄を合計し、百姓・町人等も男女を合計して比較したものである。表Ⅷについては表Ⅶと同様に薩・隅・日三国の私領をも合計してある。

表Ⅶ 文政9年に対する嘉永5年の地域別人口増減

地 域	増 減 数	百分比
鹿 児 島	+ 4,562人	6.3%
薩 摩	-15,952	4.8
大 隅	-12,843	7.6
日 向	- 1,919	2.5
琉 球	- 7,887	5.6
大 島	+ 1,339	3.6
喜 界 島	+ 1,523	16.3
徳 之 島	+ 3,625	19.7
沖永良部島 并 与論島	+ 973	7.1

(注) 薩・隅・日3国には私領を含めた。

芳：樺山本「要用集」について

表Ⅷ 地域毎階層別人口比

	鹿児島	薩摩国	大隅国	日向国	合計
武士	18,171人 (16,794) + 1,377 (8.1%)	81,138人 (81,095) + 43 (0.05%)	45,232人 (46,941) - 1,709 (3.6%)	26,153人 (27,317) - 1,164 (4.2%)	170,694人 (172,147) - 1,453 (0.8%)
百姓	14,281 (14,285) - 4 (0%)	176,278 (191,038) - 14,760 (7.7%)	82,706 (92,170) - 9,464 (10.2%)	33,989 (36,234) - 2,245 (6.1%)	307,254 (333,727) - 26,473 (7.9%)
町人	4,169 (5,094) - 925 (18.1%)	3,568 (3,419) + 149 (4.3%)	3,493 (3,602) - 109 (3.0%)	3,243 (2,993) + 250 (8.3%)	14,473 (15,108) - 635 (4.2%)
浦人	66 (88) - 22 (25.0%)	36,802 (37,688) - 886 (2.3%)	11,359 (12,420) - 1,061 (8.5%)	1,360 (1,484) - 124 (8.3%)	45,987 (51,680) - 5,693 (11.0%)
諸士家来 足輕寺社 門前等	39,922 (35,774) + 4,148 (11.5%)	13,717 (14,380) - 663 (4.6%)	11,239 (11,932) - 693 (5.8%)	8,131 (7,547) + 584 (7.7%)	73,009 (69,633) + 3,376 (4.8%)

(注) 数字欄：最上段は嘉永5年、2段目()内は文政9年の人口、3段目は文政9年に対する増減数、最下段はその百分比。

表Ⅸ 大島・琉球地域毎階層別増減数

	大島	喜界島	徳之島	沖永良部島 喜論島	合計	琉球
郷士格	+ 836人 (4.61倍)	+ 84人 (21.0倍)	+ 320人 (45.7倍)	+ 133人 (文政9年は0)	+ 1,374人 (7.15倍)	- 609人 (1.2%)
諸在	+ 525人 (1.4%)	+ 396人 (15.1%)	+ 3,282人 (18.0%)	+ 765人 (5.6%)	+ 5,968人 (7.7%)	- 7,597人 (10.0%)
家来	—	—	—	—	—	+ 324人 (2.2%)

まず表Ⅷについてみると、一見してわかる如く武士の減少はごく少数で、家来等迄含めるとむしろ僅かながらも増加しているのに対して、百姓・町人・浦人は軒並み減少している。特に鹿児島では武士・家来の増加が大きいのに対し（両者合計すると10.5%増）、町人、浦人の減少率が目

立つ。百姓は殆んど変化がない。鹿児島と対極的に大隅では全階層にわたって減少している。

もちろんこういう数字を政治経済的条件と直結して結論づけることは危険であろうが、さりとて全く無関係だともいい切れまい。もしこれが天保財政改革と何らかの関係があり、その改革政策の影響がこういう数字となって現われたと仮定すれば、その影響は大隅で最も大きな打撃を与え、かつ百姓・町人層に最も大きな犠牲を強いたものと考えてよからう。

ところが一方天保財政改革の目玉である奄美大島・喜界島・徳之島三島砂糖総買入れにより、大きな打撃を受けたとされる大島諸島が、表Ⅸの如くいずれも人口が増加しており、中でも徳之島・喜界島では1割以上2割近く増加している。しかも郷士格の増加は著しい。諸在（農民）の増加7.7%に対し妻娘まで含めた郷士格の増加は、文政9年のその8.15倍である。大島諸島では砂糖献上等の代替として郷士格を附与する政策がとられていたが、それがこの間非常に盛んに行われたことを物語るものであろう。^(注4)とはいっても大島諸島における人口増加の絶対数は、表Ⅸにみる如く諸在男女の増加が大きなウエイトを占める。これら農民の人口増加は郷士格の7.15倍には遠く及ばないにしても、約6,000人7.7%の増加である。これを琉球における農民層の10%からの減少、それは琉球における人口減少の大部分を占めるのと比較する時、驚くべき現象である。それは同じく10%余の農民人口の減少をみせた大隅との対比でも同様である。このような現象をどのように理解すればよいのか。砂糖専売制の対象となり、黒糖地獄と取沙汰される大島諸島が、改革前に比し人口が増加していることの理由に、薩・隅・日三国の減少理由を説明した論理を適用すれば、大島諸島においては天保財政改革は打撃よりもむしろ安定を与えたと理解すべきなのだろうか。大島地方における搾取が強調されるが、そしてそれは決して無稽のことではないが、この人口表から見る時、むしろ琉球や大隅地方の方が打撃が大きかったといってもよいかもしれない。天保改革における砂糖総買入れ制の実施に当って、大島地方の農業生産はそれ以前に比して或は多少なりとも改善された面があるのではないか。樺山本要用集を手がかりにした人口増減表の示す意味は、従来の通説に対して何らかの修正を求めていると考えざるを得ないのである。

郷士人員・持高等

次に(65)「諸郷郡分・地頭附并郷士人躰・持高之事」によると、薩・隅・日三国内の郡郷名や各郷内の村数・村名等は、玉里本と樺山本との間に変りはないが、地頭（領主）名や郷士数・持高・用夫数等はみな変っている。ただ殆んど変化のないはずの鹿児島より各郷への距離について、知覧の場合玉里本は11里とあるのに樺山本は8里19町となっており、大崎では玉里本13里半が樺山本で14里半となっている。その理由は今のところ不明である。

芳：樺山本「要用集」について

以下に樺山本による地頭名や郷士数等の数字を一覧表にしてかけ、玉里本との比較資料とする。このうち(1)鹿児島から(62)甕島までが薩摩、(63)桜島から(106)口之永良部島までが大隅、(107)大崎から(126)吉田までが日向である。また大崎・志布志境論地1石1斗余は、玉里本・樺山本共に変りないので、この両郷の境界争いは嘉永5年まで結論が出なかったものと思われる。

番号	郷(私領)名	地頭(領主)名	郷士(家中) 人数	同人数	所 総 高	郷士(家中)高	内寺(社)高	用 夫	野用夫	浦用夫
1	鹿 児 島		—	—	石 斗 升 合 才 24,385,12.811	石 斗 升 合 才 —	石 斗 升 合 才 —	人 5,009	人 38	人 40
2	吉 田	赤 松 主 水	542	225	5,761,61.971	1,003,96.736	11,84.792	466	28	—
3	谷 山	島 津 右 門	1,267	628	13,920,37.103	1,973,40.209	118,38.646	2,288	—	1,683
4	喜 入	肝 付 主 殿	898	278	4,183,47.097	988,74.541	111,83.329	1,512	—	115
5	知 覧	島 津 右 門	1,951	547	5,459,62.965	1,551,57.039	61,52.745	2,202	9	804
6	指 宿	喜 入 多 門	568	300	8,315,75.104	2,181,03.855	18,00.000	2,157	—	1,149
7	今 和 泉	島 津 安 芸	544	288	3,329,34.437	920,00.000	130,00.000	1,015	18	275
8	山 川	名 越 彦 太 夫	145	82	4,045,22.217	931,27.415	39,20.834	1,038	—	691
9	額 娃	島 津 蔵 人	970	447	9,611,37.240	1,409,99.651	235,14.684	2,477	10	1,393
10	川 辺	明 所	929	353	10,335,15.726	1,551,47.150	73,12.271	2,275	82	—
11	加 世 田	川 上 筑 後	2,927	934	13,574,82.013	3,787,26.969	464,91.666	4,708	40	2,701
12	山 田	島 津 登	576	167	2,818,36.718	353,45.314	2.00.000	536	—	—
13	鹿 籠	喜 入 多 門	1,506	329	3,130,81.326	703,76.488	123,55.177	1,318	—	1,044
14	坊 泊	額 娃 織 部	266	90	512,43.613	734,79.714	296,75.117	542	—	358
15	久 志 秋 目	伊集院 亘	348	117	630,03.980	206,83.437	—	368	—	668
16	硫 黄 島	(船奉行支配)	—	—	36,56.562	—	—	113	—	—
17	竹 島	(同 上)	—	—	20,68.958	—	—	18	—	—
18	里 島	(同 上)	—	—	45,16.041	—	—	120	—	—
19	口 之 島	(同 上)	—	—	110,81.312	—	七島中寺 高 88.958	32	—	—
20	中 之 島	(同 上)	—	—	82,35.417	—		52	—	—
21	臥 蛇 島	(同 上)	—	—	3,99.687	—		26	—	—
22	諏 訪 瀬 島	(同 上)	—	—	127,52.917	—		7	—	—
23	恵 石 島	(同 上)	—	—	35,02.291	—		40	—	—
24	平 島	(同 上)	—	—	75,80.312	—		31	—	—
25	宝 島	(同 上)	—	—	395,64.479	—		120	—	—
26	阿 多	平 田 直之進	771	337	4,896,61.751	591,16.330	38,48.958	1,143	35	—
27	田 布 施	伊木七郎右衛門	769	373	6,485,92.954	698,07.327	136,00.000	846	36	222
28	伊 作	山 口 直 記	1,354	661	6,985,15.829	1,820,83.888	199,24.584	1,290	120	337
28	吉 利	小 松 相 馬	493	184	2,119,22.863	590,58.607	158,20.633	573	—	4
30	永 吉	島 津 主 殿	790	314	2,377,24.914	815,12.918	108,36.791	310	—	15
31	日 置	島 津 下 総	1,570	714	3,168,13.219	1,497,68.318	153,74.685	916	—	277
32	伊 集 院	樺 山 伊 織	967	425	15,596,87.850	2,588,24.974	671,70.000	2,849	121	89

鹿児島県立短期大学紀要 第30号 (1979)

番号	郷(私領)名	地頭(領主)名	郷士(家中) 総人数	同人躰	所 総 高	郷士(家中)高	寺(社)高	用 夫	野町用夫	浦用夫
33	郡 山	郷 原 轉	955	378	5,684,00.225	638,54.588	2,00.000	534	—	—
34	市 来	明 所	1,462	448	1,160,53.390	1,820,58.533	84,01.041	2,984	35	848
35	串 木 野	豎 山 武兵衛	712	325	8,247,40.814	2,355,69.542	44,82.080	2,399	—	2,101
36	百 次	大 迫 源 七	186	68	1,259,22.503	330,88.545	3,60.000	157	—	—
37	山 田	洪 谷 左 繕	295	108	1,421,78.979	399,84.023	5,30.000	96	—	—
38	隈 之 城	伊 勢 雅 楽	995	405	6,169,98.834	1,462,08.325	47,62.500	751	—	382
39	平 左	北郷 作左衛門	1,583	638	2,578,77.989	1,854,99.511	161,48.073	94	—	—
40	高 江	島 津 要 人	424	165	3,387,28.154	340,26.889	2,00.000	352	—	—
41	中 郷	島 津 内 記	186	72	1,325,80.655	117,70.275	2,00.000	208	—	—
42	東 郷	本田 六左衛門	962	342	7,192,52.002	1,101,33.860	14,00.000	918	134	57
43	入 来	入来院 平 馬	1,184	424	5,033,47.676	1,452,99.781	211,09.070	401	48	—
44	樋 脇	新 納 主 税	650	275	5,684,00.225	1,131,92.534	7,30.000	970	5	—
45	山 崎	明 所	293	116	4,828,19.847	763,49.057	—	1,019	17	—
46	宮 之 城	島 津 凶 書	2,521	1,312	8,755,94.957	3,963,10.563	494,93.409	1,091	106	—
47	鶴 田	田原藤太左衛門	402	210	5,156,88.535	1,284,28.844	2,64.647	616	34	—
48	大 村	島 津 左 膳	508	222	6,054,16.646	1,336,81.203	9,00.000	652	12	—
49	黒 木	島 津 豊 後	752	409	1,714,30.729	299,00.000	56,00.000	105	—	—
50	佐 志	島 津 勘解由	341	139	2,562,75.657	508,29.532	31,63.820	337	—	—
51	蘭 牟 田	樺 山 主 殿	614	250	1,694,68.906	250,76.912	46,92.041	94	—	—
52	大 口	島津豊後 差引	766	393	11,779,24.165	2,761,98.197	36,00.000	672	55	—
53	羽 月	山 口 右源太	366	137	6,017,16.437	566,45.856	3,50.000	311	3	—
54	山 野	九良賀野 亘	205	98	2,069,98.639	431,19.626	2,00.000	101	19	—
55	出 水	島 津 豊 後	2,963	1,112	22,116,21.665	8,185,94.408	118,83.438	2,066	55	751
56	高 尾 野	三 原 藤五郎	786	347	5,512,43.179	1,057,61.271	13,70.208	359	28	—
57	野 田	猪 飼 鋤太郎	383	177	4,888,30.773	510,44.670	4,00.000	375	14	—
58	長 島	藤 井 綴 喜	1,153	410	3,675,60.310	1,369,66.843	10,00.000	655	—	806
59	阿 久 根	島 津 求 馬	559	238	8,783,46.859	1,613,55.312	3,27.084	2,079	—	170
60	高 城	町 田 監 物	1,568	431	5,613,49.879	1,049,93.395	6,00.000	1,033	33	154
61	水 引	高田十郎右衛門	570	208	7,103,49.879	736,97.862	35,36.979	1,323	—	553
62	甕 島	迫水 善左衛門	1,952	603	3,581,28.020	1,066,32.553	2,60.000	上甕 1,480 下甕 1,686	—	2,152 647
63	桜 島	有 馬 舍 人	1,362	627	2,611,90.130	714,22.660	—	1,963	—	—
64	牛 根	畠 山 藤次郎	398	395	1,267,90.691	179,80.122	—	448	—	225
65	垂 水	島 津 讃 岐	1,360	720	6,723,33.804	5,315,55.294	263,89.994	820	—	355
66	大 根 占	川 上 式 部	331	202	5,699,14.155	223,44.637	2,00.000	896	—	101
67	小 根 占	鎌 田 凶 書	550	301	7,416,61.219	506,13.208	37,00.000	1,461	—	118
68	佐 多	川 上 龍 衛	295	184	3,823,79.144	91,13.064	2,00.000	720	—	491
69	田 代	種子島加次右衛門	228	130	2,570,99.572	391,87.915	5,00.000	385	—	—

芳：樺山本「要用集」について

番号	郷（私領）名	地頭（領主）名	郷土（家中） 土人人数	同人数	所 総 高	郷土（家中）高	寺（社）高	用 夫	野用夫	浦用夫
70	内 之 浦	得能 彦左衛門	235	112	4,497,18.569	322,79.589	2,00.000	281	—	311
71	高 山	島 津 隼 見	595	322	11,285,99.394	2,548,10.211	46,70.800	1,089	84	87
72	始 良	和 田 助太夫	181	102	6,936,55.406	714,71.407	72,94.375	534	32	—
73	大 始 良	新 納 内 蔵	233	128	7,487,04.960	486,83.741	2,00.000	761	—	—
74	新 城(私)	島 津 要 人	728	397	1,289,64.803	318,13.546	40,00.000	174	—	106
75	華 岡(私)	島 津 若 狭	342	180	1,553,83.189	718,87.485	81,10.000	506	22	90
76	鹿 屋	吉 松 伸	347	185	9,830,80.282	1,964,01.897	—	1,190	72	127
77	串 良	明 所	457	213	18,026,02.352	907,75.249	7,42.135	1,556	33	128
78	高 隈	比志島 静 馬	99	62	3,214,14.642	519,87.601	2,00.000	267	—	—
79	百 引	二階堂 源太夫	312	198	3,313,81.140	986,07.192	4,59.000	282	—	—
80	市 成(私)	島 津 石 見	332	163	2,357,97.913	917,91.119	26,58.325	136	—	—
81	恒 吉	平 田 勅 負	215	124	3,606,74.990	852,36.255	2.00.000	361	16	—
82	末 吉	友 野 市 助	989	513	17,456,97.923	3,951,99.106	36,00.000	1,421	57	—
83	財 部	北 郷 男 吏	939	444	8,937,75.762	2,173,30.707	15,20.000	684	28	—
84	福 山	明 所	538	252	2,733,47.437	1,165,81.687	23,30.204	448	—	281
85	敷 根	谷川 次郎兵衛	412	145	3,266,09.140	436,94.940	2,00.000	280	—	98
86	国 分	川上 矢五太夫	1,841	888	24,121,30.963	4,934,23.436	103,34.271	2,078	371	1,086
87	清 水	明 所	1,116	461	5,666,28.130	1,069,42.091	19,48.958	446	—	—
88	贈 喉 郡	北 郷 多 仲	1,058	445	5,308,24.514	1,322,18.338	41,00.000	315	—	—
89	踊	東 郷 左太夫	392	169	5,182,51.342	661,98.831	2,00.000	252	13	—
90	日 当 山	明 所	354	162	2,571,96.129	503,79.587	13,00.000	199	—	—
91	横 川	鎌 田 哲二郎	571	196	4,285,38.237	800,47.971	2,00.000	279	65	—
92	栗 野	坂元 休左衛門	416	263	8,128,81.307	1,348,68.540	21,00.000	470	20	—
93	吉 松	伊集院周右衛門	419	237	5,116,94.013	889,61.780	2,00.000	151	7	—
94	湯 之 尾	小笠原 轍	246	135	3,133,10.079	428,15.279	2,00.000	128	9	—
95	馬 越	伊集院 隼 衛	245	143	3,801,86.279	355,90.000	8,56.968	128	36	—
96	曾 木	諏 訪 数 馬	299	97	4,731,81.533	527,68.989	7,89.062	270	25	—
97	本 城	鎌 田 典 膳	360	187	5,654,62.834	816,74.301	2,00.000	312	25	—
98	溝 辺	富 山 半 蔵	347	151	4,545,59.183	551,48.161	2,00.000	285	5	—
99	加 治 木(私)	島 津 兵 庫	1,818	815	10,172,99.555	7,315,58.943	493,93.946	857	—	868
100	帖 佐	島 津 周 防	963	435	10,070,42.127	1,301.91.967	90,14.300	435	24	325
101	重 富(私)	島 津 周 防	736	368	3,754,21.093	897,54.398	115,00.000	335	—	458
102	山 田	倉 山 作太夫	444	199	5,114,96.395	720,67.125	2,60.000	341	6	—
103	蒲 生	菱 刈 李之介	1,552	768	9,381,02.879	3,215,53.380	83,90.533	494	84	—
104	種 子 島(私)	種子島 弾 正	4,236	998	1,067,65.662	3,530,19.250	435,34.269	1,251	19	617
105	屋 久 島	屋久島 奉 行	—	—	1,384,25.417	—	—	1,176	—	—
106	口之永良部島	屋 久 島 之 内	—	—	184,81.458	—	—	80	—	—
107	大 崎	島 津 勅 負	832	387	10,806,85.406	1,163,40.353	5,00.000	1,350	66	84

鹿児島県立短期大学紀要 第30号 (1979)

番号	郷(私領)名	地頭(領主)名	郷士(家中) 土総人数	同人躰	所 総 高	郷士(家中)高	寺(社)高	用 夫	野用夫	浦用夫
108	志 布 志	末 川 近 江	919	469	13,563,71.204	3,926,52.308	743,67.562	1,632	—	802
109	松 山	北 郷 哲五郎	240	103	2,479,28.719	695,84.781	2,00.000	285	8	—
110	都 城私	島 津 豊 前	5,402	2,307	34,059,20.186	13,296,63.142	1,307,50.500	1,358	513	—
111	勝 岡	宮之原 主 計	464	137	3,547,12.227	705,33.681	2,00.000	453	—	—
112	山 之 口	伊集院喜左衛門	293	128	4,328,97.271	977,60.855	2,00.000	432	—	—
113	高 城	蒲生 郷右衛門	467	239	9,559,61.637	1,826,60.024	29,48.400	520	82	—
114	穆 佐	島 津 仲	332	220	3,814,60.286	1,441,23.124	10,40.000	205	26	—
115	倉 岡	高 橋 縫 殿	206	120	1,646,90.647	537,64.626	2,00.000	248	40	—
116	高 岡	島 津 石 見	1,365	752	19,454,74.445	10,357,05.690	123,47.083	1,222	150	—
117	綾	町 田 式 部	525	298	4,514,86.008	1,302,46.622	6,00.000	158	27	—
118	野 尻	桂 太郎兵衛	532	275	3,938,82.311	1,378,42.618	5,30.000	489	5	—
119	高 原	島 津 相 馬	499	175	5,688,84.167	1,398,28.297	168,78.645	622	10	—
120	高 崎	義 岡 蔵 人	316	142	3,944,05.245	614,17.069	2,00.000	248	11	—
121	小 林	森川 利右衛門	799	349	10,171,20.024	1,938,07.033	94,28.277	834	76	—
122	須 木	奥 四 郎	479	206	1,193,41.195	596,53.734	2,60.000	58	6	—
123	飯 野	大 野 多 宮	547	333	10,673,78.938	3,087,94.304	135,42.917	326	31	—
124	加 久 藤	島 津 勘解由	421	251	8,944,37.236	1,033,83.390	79,43.332	359	23	—
125	馬 関 田	仁 禮 小 吉	556	91	3,389,37.993	457,29.179	1,60.000	109	1	—
126	吉 田	竹下 仁左衛門	278	150	3,864,37.502	527,55.266	2,00.000	102	1	—
外	大崎志布志	(境 論 地)			1,19.792					

(注) 郷名中(私)は私領であることを示す。

薩・隅・日三国総計

	薩	摩	大	隅	日	向	総	計
合郷士数人数	31,700人		19,337人		10,070人		61,107人	
合郷士人躰	12,427人		9,766人		4,825人		27,018人	
合 総 高	石 升 才 325,977,95.344		石 升 才 268,083,73.974		石 升 才 159,650,90.339		※ 石 升 才 755,461,88.341	
合 郷 士 高	石 升 才 52,665,39.187		石 升 才 38,776,60.220		石 升 才 38,596,86.080		※ 石 升 才 125,282,08.219	
内 寺 社 高	石 升 才 2,764,39.523		石 升 才 667,10.609		石 升 才 667,10.609		※ 石 升 才 4,840,96.346	
合家中士総人数	14,747人		9,552人		5,402人		29,701人	
合家中士人躰	5,826人		3,641人		2,307人		11,774人	
合 家 中 士 高	石 升 才 15,386,64.210		石 升 才 19,013,80.035		石 升 才 13,296,63.142		※ 石 升 才 47,707,06.387	
内 寺 社 高	石 升 才 1,749,29.773		石 升 才 1,455,86.534		石 升 才 1,307,50.500		※ 石 升 才 4,612,66.807	
合 用 夫	61,754人		25,689人		11,010人		98,453人	
合 野 町 用 夫	1,135人		1,164人		1,076人		※ 3,374人	
合 浦 用 夫	20,645人		5,978人		886人		※ 27,507人	
合 諸 島 用 夫	559人		1,256人		—		1,815人	

(注) ※印の総計は、薩隅日三国の合計と合わない。特に石高の差は大きい。

芳：樺山本「要用集」について

(注1) 桃園恵真「薩藩における宗門手札改の実施回数について」『鹿大史学』第3号, 1955

(注2) 『鹿児島県史』第2巻 787～790頁

(注3) 例えば原口虎雄『幕末の薩摩』103頁

(注4) 山田尚二「大島島役人前仁志の家計について」『鹿児島史学』第14号, 1966

〔論文受理 1978.9.17〕